

ヨーロッパにおける 自然改造と 自然保護

○ 田村 明



1. はじめに

—ヨーロッパの2つの 自然—

私がアテネを訪れたのは8月の末であった。古代文明の輝かしい頂点であり、ヨーロッパ文明の偉大な源流であるアテネの町に、言い知れぬ期待と夢を持っていたのは私ばかりであったろうか。アテネ、ギリシャ、心よい言葉の響きはいつか夢をふくらませ、2,000年をこえる歴史を超越したものが私の心に宿っていた。

しかしアドリア海を越え、紺碧のエーゲ海の向こうに見下ろしたものは褐色の岩山の下に、白日の太陽にむきだしにされた一握りのほこりっぽい町であった。私はこれはアテネではない。少なくとも私の夢に描いたあのアテネであるはずがないと思った。この砂漠のような岩山を越えた別の山ふとこに、あの私の知っているアテネの町は深く秘められていなければならないと思った。しかし私のひそかな願いは無惨に打ち破られて、機体はそのまますすくに、褐色の砂漠の中に着陸していった。

1本の緑もない禿山、からからに干からびきった大地、むっとする褐色の熱気、それらがまず私を包みこんでいた。もちろん1本も木が無いとは正確な表現ではなかったろう。わずかばかりの灌木が岩の合間にへばりつき、ヒースなどがからまっていたはずである。しかしそれらはこの褐色の大気の中に色あせて、その緑を主張することはできなかった。

酷暑の夏をすぎれば、ギリシャにも多少の潤潤が加えられ、緑の草も少しは息をふきかえすだろう。しかしもはやこの裸山を柔かく包みこむことはできない。私の抱いていた緑

と泉のしたたる常春の国ギリシャは、この地上から姿を消してしまったのである。アトロポリスの丘は今も町の中央にそそりたっている。しかしその向こうに沈む夕陽は同じものでも、古代ギリシャはそこには存在しないのである。

××× ×××

これと対照的なものは、モスコへ向かうソビエトロシアの大地だった。1万メートルの上空から、四方は地平線が大空にとけあつて、その境界を見分けることはできないが、その何の変哲もなく、だだっぴろく広がった平野には黒々と森が続いていた。おそらくまだ人間の手にふれていない森林ではないだろうか。「タイガ」とよばれる針葉樹の密林、地の果までも続く平坦な平地。その中にときどき道が1本、森をまっすぐ簡明に突き抜けて、これもまたはるか遠くへ消えていた。この上空から見渡す土地には、まるで人間が1人も住んでいないようであった。少なくとも町を見つけることはできなかったし、地表の小さな突起さえも認めることはできなかった。ただあるのは黒々と続く森だけである。2,000年以上前にギリシャでは終わってしまったことが今ロシアでは始まっているのである。森林を切り開き、新しい町が生まれ、工場が建設される。大きなダムが築かれ、発電所が据えられる。こんなことがこの森のどこかで行なわれているはずである。しかしこの果しない広さは、そんなものは海中の1滴にすぎないのだろう。あまりにも大きな自然の中で、20世紀の科学力をもってしても、まだまだ人間の営みは小さいものなのである。

このような2つの姿はわれわれに3,000年の歴史を同時に写しだしてくれる。地形の相異はあるにせよ、この2つの姿は、歴史始まって以来の人間の自然についての物語りの終りと始まりである。ヨーロッパの自然はこの2つの両極の間のどの位置かにかおかれている

といてよいであろう。

2. 消えていった自然の 恩恵

—地中海の自然文明史—

不毛の地と化したギリシャに話を戻そう。この褐色の土地こそ、かつて人間が自然を征服し、この地に定着し、すばらしい文明の華を開かせた土地なのである。しかし征服されたかに見えた自然は、かえって逆に人間の文明に攻撃を加えていった。その攻撃は長くかつ執拗であった。そして遂にこれを埋没させてしまったという人間と自然の物語の生きた実例なのである。たしかに気候も当時は現在よりもはるかに潤潤で文明を発達させるのによい条件があった。ヘロドス時代(紀元前400年代)までは、山には森林が繁茂し、平野は肥沃にして多量の穀物を産し、農法も進歩し、渓谷には豊かな水が流れていたようである。しかし気候の変化もさることながらこの地に文明を築いたギリシャ人は、山地丘陵を切り開いて、オリーブや葡萄を栽培し、同時に木材は地中海の各地に仲出した植民地の往来のため、船舶の建造に利用され、かくして森林は順次伐採されていった。一時は木材の国内需要を確保するために森林保護に意をそそいだこともあったが、大勢に抗することはできず、その上ペルシャ戦役などの被害で農耕を捨て、山地に放牧を行なうようになり、山地の荒廃はますます激しくなり、土壌の流出がひどく、耕地を埋め、かつて栄えた都市さえも埋めつくしてしまった。現にギリシャの数々の遺跡は大規模な発掘によって地上に現われたのである。

人間が自然を利用し、開発したはずであった。少なくともわれわれが嘆賞するギリシャ文明の基礎は、この地にあった自然の恩恵を

うけ、この資源の支えの下に成立したのである。しかし掠奪されつくした自然は逆に手ひどい復讐を加えてきた。それ以来この地は自然の恩恵から見離され、現在でもヨーロッパにおいてもっとも貧しい国になっている。

ギリシャばかりではない。古代に栄えた地中海文明の町々は等しくこのような経過をたどっている。南イタリア、フェニキヤにわれわれはその実例を見ることができる。人間が文明を築き、自然の恩恵を食いつぶしてしまったときに、自然は不毛という形でその返答をするばかりか、逆に人間の作った文明をその土砂の下に埋没させてしまったのである。とくに地中海岸は風土的に乾燥しており、森林の安定度は比較的低いから、この傾向はいっそうはなはだしかった。有名なオリンポス山は豊かな森林におおわれていたというし、古代ローマでディアナの祭儀の催されたアルギドウス山はカシの森であった。それらは今は岩山に化している。

地中海文明の時代に栄えた国々は、現在古い遺跡を示してはくれるが、歴史の上に大きな役割りを果たしてはいない。かつて豊かな自然の恩恵を与えられてきたこの地域は、自らの手でその恩恵を刈りとった。今は不毛の土地を抱いて、過去の栄光を夢見るばかりである。

3. つなぎとめようとする自然

—自然保護の歴史—

人間の歴史は自然開発の歴史ともいえる。限られた人間の居住するに快適な条件の土地から徐々にその範囲を広げ、自然を住むのに都合のいい条件に変え、これから人間に必要な産物を産み出していった。表に見るとおり、人口の増加ははじめ、きわめて微々たるものであったから自然がとくに脅威を受けることはなかった。しかし産業革命以来、近代科学と技術が、天然資源の利用をうながし、これをきわめて効果的にしたため、世界の人口は急上昇を始めた。1万年前にはほんの一握りの人口しかなかったであろう。西暦紀元ごろ約2.5億人と推定されるが、それまでは長い曲折の歴史があったと思われる。それが倍の5億になるまでには、なおまた1,600～1,700年を費した。しかし次に倍増して10億人になるまでには200年しかかからなかったし、そのあと20億になるのには100年を切った。

このような人口の急増は、人間と自然のバランスがくずされ、これに警告が発せられることになった。とくに産業革命後の、鉱山業、ガラス製造業、製鉄業などの鉱工業には燃料用に多量の材木を必要とし、その乱伐が始ま

世界人口の倍増に要した年数

西暦	人口	倍増の年数
年	億人	年
1	2.5	
1650	5	1650
1850	11	200
1930	20	80
* 1975	40	45
* 2010	80	35

(* はH. F. Dornの推定)

ったためである。17世紀後半、もっとも進んでいたイギリスでは早くも森林乱伐の危険が叫ばれているし、このあたり一帯ほとんど80～90%は森林で占められていたと思われるドイツも、ようやく森林は全土の30%程度になり18世紀以来、森林の合理的管理が行なわれた。デンマークでも100年ほど前から自然保護運動が始められた。しかしこのように早期に自然の保護について真剣に考え出した国々は、その後も順調な発展を続けたが、これをおこたって、相かわらず森林の乱伐を続けたスペインは、かつての大國の位置から転落し、国土は荒廃してしまっし、傾斜地を開墾し馬鈴薯を栽培していたアイルランドでは、土壌の流出によって地味を荒廃させ、16世紀の人口の半分に減少してしまっし。このように自然保護に早く目ざめた国と、これを軽視し国土を荒廃させた国とのその後の伸長が対照的に分離していったのは興味深い出来事である。自然はこれを掠奪するものには報復を行ない、これと調和し、共存しようとするものには、その持てる恩恵を与えてきたのである。このように資源としての自然保護を自らの知恵の中に見出していったのが現代までの歴史といえるだろう。

××× ×××

ところが、人口の増加は更に爆発的であり、人間による自然開発も、人口圧力と機械力の進展で、相乗的に加速されてきた。現在のみまでゆくと紀元2,000年には80億になんとしているし、2100年ごろには500億人と推定されている。このような人口の増加圧力は、人間と自然のバランスをくずしがちである。ヨーロッパでは王有林や貴族の別荘などの形で古く首都の周辺に保護されてきた保護林が多く存在していたが、さらに国土の自然を保護し、鳥獣や景勝地、史跡などを保存する運動がおこった。

周知のように国立公園の第1号は自然開発の進んだヨーロッパではなく、1872年に指定されたアメリカのイエローストンで、設立の趣旨は、神の創造したすばらしい自然に感謝し、これを保存するとともに、多くの人びとに利用、観賞させ、この喜びをともに分かちあおうというものである。自然に対する崇敬と

畏敬の念がその精神的な中核になっていることは自然保護思想のうちでも注目すべきことであろう。

ヨーロッパ各国国立公園

国名	国立公園創立年	個所数	総面積
			1,000ha
ソ連	1919	17	4,202
フィンランド	1938	9	104
ポーランド	1920	9	94
スウェーデン	1909	15	415
イギリス	1935	10	1,365
ドイツ	1930	6	243
フランス	1914	1	22
スイス	1914	1	16
イタリア	1923	4	188
ギリシャ	1938	1	4
アメリカ	1886	18	7,552
日本	1934	19	1,746

アメリカのこの運動はヨーロッパにも影響を与え、イギリスでは鳥類保護協会や史跡名勝保存協会などの活躍で、自然保護のために土地を保留するようになり、ドイツではパーデンのコンベンツ博士の努力により自然保護法が成立した。しかし法制的な整備が行なわれ国立公園が指定されたのは20世紀に入ってからのものである。さらにこの種の保存措置は1国だけに限定されるのでは足りないとして、スイスのパウ・サラシン博士の主張により1913年数ヶ国の代表がベルンに会したが、翌年の第1次世界大戦で中絶し、その後曲折をへながら第2次大戦後、国際連合の支援の下に国際自然保護連合(International Union-the Preservation of Nature)の第1回総会がパリで開かれた。

この定款では次のように自然保護の意義と原則をのべている。自然および自然資源の保護とは「世界の生物社会と人類の自然的環境と、そして人類文化の根源が依存する、地上の更新しうる自然資源を保持すること」である。

また自然美は精神生活につき高度の公分母の1つであり、レクリエーションの欲求に対して欠くことのできない枠組である。さらに文明はこれらの資源を発展させるために、いよいよ効果のある手段を発見して今日の高い水準に達したし、また土壌、水、森林、野生動物ならびに原始的な地域は、経済、社会、教育および教養などの目的につき絶対に必要である。自然資源が次第に貧弱する結果は、人類の生活水準を低下せしめることになる。自然と自然資源の保護と保存とは、すべての国民の痛切な関心事であるにかかわらず、しかもこれを推進するに役立つべき国際的機関でこれに関心を払うものはひとつもなかった。そこで……ここに責任ある国際機関を設置することは意義あるものといえよう。

その後1950年イギリスのエジンバラで開かれた第5回総会では会の名称は「自然および

「自然資源保存連合」とあらためられ、さらに純粋の自然のみならず、森林資源、水源涵養、野生植物保護、レクリエーション、観光等の広い分野にわたって活動することになった。とくに機械文明の進展や、過大都市の出現、人口の都市集中は、自然の中における観光が欠くことのできないものとして重視されることになり自然保護運動の中核になっている。この国際的な活動を受けてヨーロッパの各国に設けられている自然保護区は、

- 1 学術研究上必要な地区
- 2 国土の代表的自然景観地域
- 3 市民のレクリエーションおよび教育上必要な地域

と多面的な見地から保護指定が行なわれている。これらの自然保護区や国立公園はヨーロッパでは地区指定制で、アメリカのように国有地主義をとっているのはスウェーデンを除き少ない。この点日本の国立公園と制度的には似ているが、特別地域で自然保護を徹底的に遂行しており、その管理の点、利用者の公徳心の点からみると、日本よりはるかに確実に保護を行なっている。一面国立公園区域は総体にあまり広くはない。すでに開発の歴史も長く、未開のままに放置されている部分はほとんどなくなっている。そのためレクリエーションよりはどちらかといえば自然および動植物の保護に重点をおいているといえよう。

西ドイツでは自然保護区管理研究所が各州におかれ、多くの場合所長には生態または植物社会学者がなっており、積極的に保護地域の研究、新たな保護予定地の生態学的、植物社会学的調査を行なっているといわれ、制度的にも方法的にも着実にその実をあげられるための配慮がなされている。

フランスは強大な王権を背景に、王侯貴族の狩猟場であったブローニュの森、フォンテンブローの森などがきわめて良好に保護され、前者はナポレオン時代から都市公園として整備され、後者はルソーはじめ、この森の一隅にあったバルビゾン派の風景画家によって著名となり、この森を愛好するフォンテンブロー友の会が組織されて公的な組織のできる以前から、有志の手によって愛され、親しまれ、保護されてきたのである。

スイスは全国、公園のように美しいが、国立公園が1つある。ここは国土の一部に原始状態を残すことを主眼とし、徹底した動植物保護を行ない、釣魚、植物採集はもとより、昆虫の採集まで許可されない。園内は自動車乗り入れを禁止、公認の20の歩道ルートを歩くのである。

このように各国とも自然の恩恵をつなぎとめようとする努力を政府のみならず、民間団体を通じても活発に行なわれている。1958年

の第6回IUCN総会は、地中海沿岸の古代文明国が土壌の問題を怪視し、衰退したことをとりあげ、再びその愚を繰り返さないことが議題にのせられている。ヨーロッパはもっとも早く開けただけに、自然を人間の側に留めておくために多大の努力を払っている。これは身近な失敗を目のあたりに見ているためでもあろうが、単に国立公園指定のみで満足するようなことをせず、国民の良識として処理しているように見受けられる。

マッターホルンにケーブルカーをかける案が出されたときは識者の反対にあつてつぶされた。ユングフラウをはじめアルプスの高い山々にもケーブルのかけられているところもあるが、山頂は避けて、肩のあたりにとどめている。この方が景観の保存にもなるし、また観賞者にとっても、すばらしい山容を眺めるのはかえって便利である。何でも高いところがいいというより、自然の開発利用はひとつの良識の下に行なわれていることは、自然の価値をほんとうに高く認識しているからであろう。自然が人間への恩恵であることを、歴史をとおし、科学的な認識をとおし、さらに大きな世界観の中で把握されている。

4. 手をにぎりあう自然

—自然と人間の調和—

ヨーロッパはもっとも人口密度が高く、開発が進んでいる。したがってまったく未開の自然を開発する余地はソ連や北欧を除いてはなくなっている。ドーバー海峡の架橋またはトンネル、モンブランの貫通トンネル、ユーロポートの建設等、大規模な自然開発計画もないではないが、北極海の温水化、砂漠の沃野化等、まったく未開の地を切り開く自然改造ではなく、あくまで現在の自然を尊重し、これの利用に重点がおかれている。将来未開の地に行なわれる積極的な自然や気候の改造を行ない、砂漠に花をさかせ、ツンドラ地帯を耕地にしようとする計画は、自然との調和点の拡大であり、今後の大きな問題であろうが、ヨーロッパではすでに人間と自然とが一定の調和点に達したように思われる。このため自然の改変よりも地理的距離の克服のための道路の発展、交通手段の開発により、相互の利用を効率的にすることに意をそそいでいる。

ヨーロッパの都市生活は古くから農村と区分され、アパート生活が多く緑から切り離されているため、その車調さを取りもどす自然を生かした大公園が数多く都市内に設けられた。市民はひまを作ってはここで緊張した精神を休ませている。公園だけではない、町を

出て農村へ出ると、中欧では大きな山もなく、ゆるやかな起伏の中に丘が、森が、牧場がまるで公園のように広がっている。ヨーロッパには日本のような強い雑草はない。そのかわり柔らかな牧草が、もうせんのようにやわらかく大地を包む。樹木も日本のような曲りくねったものは無く、のびのびとどっさり正しき笠形を見せている。この規則正しさと自然の柔順さがヨーロッパの合理的精神を養ったと和辻哲郎は言っているが、ヨーロッパの自然はまったく人間の手によって親しみやすいものとなり、人間はこれと調和することにより生活の豊かさを得ることを知っている。古代から中世にかけて陰うつな密林がしげり、呪術が行なわれ、深い霧の中にとどまっていた中欧や北欧が今は全土が公園と化しているのは、けっして一朝一夕にでき上ったものではなく、自然を開発しながらも、これを保存することに心がけてきたからである。道路1本つけるにも切りひらかれた周辺や街路樹には立地上当然そこに生育可能な潜在自然植生を植物社会学方法でとらえて復元し、勝手な外来種などをもってこない。このようなキメの細い科学的な手段が、ヨーロッパの自然保護を支えているのである。人工物の破壊は単なる破壊で、復元もまた可能である。自然の破壊はそのバランスをくずすとその破壊の範囲は全体に広がるし、これを復元するのは不可能に近い非可逆的変化を示す。衰退した古代文明国からこの経験を得たヨーロッパは自然の保存と調和が文明のペースになっている。

私がヨーロッパを訪れてとくに印象が深かったのは、雨のどしゃぶりの中ではあったがストックホルムの市の南方にあるスゴグスルコという墓地を見にいったことである。グソナル・アスプルニドの建築があるので有名であるが、それよりも、この墓地は人間と自然のもっとも美しい調和といえるだろう。自然の林の芽々としげえるそのすぐ木の根もとからやわらかな芝生が木の間をぬって続く。その芝生の上に点々と何の用もなく墓石がおかれて、その上に色とりどりの花がおかれてある。林は整然と静まっているが、清潔で雨の中なのに明るくおちついていて、社会保障制度のすぐれたスウェーデン人は最後にこの安らかな自然の中に寝るのである。

ここでは人間はけっして自然に挑戦はしていない。しかしそこに人間の手を入れることにより、林はまた安らかな柔さを人間に返すのである。ヨーロッパでもっとも高い生活をしているスウェーデンでこの自然と人間の調和の頂点に達した墓苑をみることは、最後まで心のうちに自然を愛する心と、自然への憧憬がもえつづけていることがわかるのである。〈環境開発センター計画部長〉